

田中豊治著 水産物流通の地理学的研究：大明堂，1982年，A5判260頁，4,500円

著者田中豊治氏は、長年山陰地方の現場（高校）の教師として後進の指導に従事し、教頭・校長という要職につきながら、一貫して研究活動が続けてこられた篤学の士である。評者などよりは、はるかに先輩として研究生活に入られていたいわば先達のひとりであり、しかも公職を辞された後も、依然として燃えさかるような学問への情熱をたぎらせて、研究成果を世に問うておられるのは、敬服の限りと申すべきである。

本書冒頭、東京水大の平沢豊教授および著者自身も述べておられるように、高校教育の現場から得られた体験から、水産教育が従来ややもすると技術面に偏重気味で、経済・経営といった社会的な側面が軽視され勝ちであることを憂い、生産・製造加工・流通に関して自主的に態度決定しうる社会人・経済人のための教養を身につけさせるために執筆したとある。

全体の構成は、第1章が水産物流通に関する地理学的研究の視点という題目で、水産物流通に関する従来のわが国の地理学的研究を整理し展望を試みている。さらにそれら諸研究の問題点を批判的に浮彫りにしている。そのあとを受けて、著者の意図する水産物流通の地理学的研究の目的と方法が示されている。

第2章は水産地理学における漁港の概念という表題のもとに、漁港の概念について内外の各専門分野（地理学・経済学・土木工学・水産学等）の研究者の諸説を紹介し、漁港論の推移を(1)土木工学的な漁港構築論に重点をおいた漁港の形式的構築観、(2)漁港の機能に重点をおいた機能論的漁港観、(3)産業構造の中における漁港の経済的位置付け論へと展開されてきたことを述べている。以上のような内外の各研究分野の成果を踏まえながら、著者自身の漁港の概念規定を試みている。それによれば漁港の基本的性格は、交通手段からみれば漁船の出漁地であり、漁獲物の荷揚地であって、これを別の面からとらえると、道路機能の延長であるとする。漁港が水産物流通の「結節点」としての性格をもつと考える立場に立つならば、それは漁港が生産手段の1つであるという、基本的位置付けを経済的に示している点か

ら生じていると説明している。著者はこのように水産物流通の研究の第一歩に漁港をおき、さらに研究出発の原点たるべき統一理論を資本論に求め、最後に筆者自身の漁港に関する概念規定を次のように下している。「漁港とは、漁民が漁船という生産・運輸手段をもって、出漁準備・水揚げをなし、漁獲物の価値付加が行われるターミナル機能を持つ漁業上の生産手段の港湾である。」このように漁港を位置付けした上で、著者は水産地理学における漁港の機能論的検討という項目を設定して、単純な機能要素よりなる小漁港から巨大港湾としての性格をもつ漁港機能にふれ、さらにいまひとつ漁業経営上の基本的要素、すなわち漁船・漁獲物・漁民の凝集が大で、地域住民の漁業に対する所得依存が大である地域に形成されるものとして、機能統合漁港をあげている。そして巨大港湾的漁港の具体的事例として、東京港と大阪港を、機能統合漁港の具体的事例としては、鳥取県の境港を取り上げて説明を加えている。

この章の最後においては、以上の論述の総括として、漁港の類型的把握を試みている。著者は漁港の性格判定を明らかにするため、関口雅臣・坂井澄郎らの研究成果や、水産庁が漁港への投資効果判定を行った際に、その判定要素として取り上げた8項目を図上に示し、漁港性格形成図を作成している。8項目とは、A漁民、B漁船、C生産（漁獲）、D流通、E地場消費、F資本、G施設設備、H社会環境である。AよりHまでの諸要素を8角図形で示し、その結果状況により漁港の性格が読みとれるというわけである。

さらにすすんで著者は、前述関口雅臣や漁業経済学者として著名な小沼勇の学説などを勘案して、一方では漁港の規模の大小を、また一方では漁港機能の構成要素を、それぞれ縦軸と横軸として、漁港の類型表を作成している。

第3章は水産物流通の諸様相とその地理的意義という表題で、複雑多岐にわたる水産物の流通の様相を示し、さらに基本的経路を図示している。また、近年とみに増えた冷凍水産物需給の問題にもふれ、マグロ・エビ・サケ・マスといった主要魚種ごとに項を設けて詳細な記述を行っている。この章の最後に、最近わが国の総水揚げ量の60%近い量が、特定の小数漁港に集中することによって生ずる諸問題、大量・

迅速かつ合理的な流通・加工・処理・保蔵の必要性が生じたことを指摘し、昭和46年より実施された水産物産地流通加工センターの形成事業の意義にふれ、それらの全国的な分布・配置状況を図示している。

第4章は水産物市場の地理的意義という表題で、著者は市場を需給の相会する場とし、価格形成と商品流通の機能を果たす場としてとらえた斎藤一夫の学説を支持して、すすんで水産地理学における市場概念のとらえ方には、次の3つの場合があることを指摘している。すなわち、①水産物貿易に表現される国際市場、②卸売市場体系の水産物、③場外流通における水産物市場がそれである。これらの中で従来までの研究は、ほとんど②ばかりであったが、昭和40年以降急激に増加してきたコールド・チェーンの発達や輸入冷凍水産物の量を考えるなら、また国際的な貿易商品として、水産物がますます重要性を高めている傾向からいって、①や③に関する地理学者の研究の必要性を唱えている。この章の後半は、大漁港市場および中漁場市場に対する類型としての漁村市場の構造と変容を、主として山口県（長門浦）、京都府（丹後地方）、兵庫県（但馬地方）を中心とした日本海沿岸各漁村の集約的実態調査から浮彫りにしている。これら日本海沿岸地域と対比する意味で、東京湾および大阪湾内に残存している、大都市圏内のいくつかの漁村における水産物の流通と産地市場を取り上げて分析している。

第5章は輸入水産物の増加と流通問題、第6章は市場外流通と卸売市場問題となっている。昭和40年代の終りより、水産物貿易構造に大きな変化がみられ、水産輸入大国化した最近のわが国のアップ・ツー・デートな問題にふれて、輸入港別、魚種別輸入量を一覧表に示し、鮮魚もの、生きているものは西日本の港または空港に偏っていることを指摘している。

水産物の市場外流通は、1970年代になって生鮮食料品流通の中で、社会的にクローズアップされたものとして著者はとらえている。また市場外流通を、既存の卸売流通に対する全く新しい理念の流通で、バイパス的流通であるとしている。

結章において著者は、従来わが国の水産物流通に関する地理学サイドからの研究が、ほとんどなされていなかったことを指摘している。その理由として、生産と消費とを結ぶ場たる漁港の研究では、流通現象は経済学の領域として、接近するのをはばかって

いた傾向があったことをあげている。しかし、水産物の生産・流通・消費を一貫して地域問題としてとらえてこそ、社会科学としての地理学的任務があるとしている。最後に、著者による水産物流通の今後の課題と展望として、流通機構の合理的整備が最重要課題で、卸売市場の広域系統整備の重要性を改めて問い直さなければならないと結んでいる。

以上、簡単に本書の内容・梗概を章を追って紹介してきた。非礼にわたるかも知れぬが、評者の理解不足をも省みずに感想を述べて、本書の書評の結びとしたい。個々の地域や個別的な漁業種類・魚種についての研究は、皆無ではなかったとしても、わが国の水産物流通に関して全体的な展望を下し得る、地理学者の手になる書物がなかったことは確かである。その意味で本書の刊行は、この分野での先駆的な研究として、また水産物流通のあらましを理解するための恰好の入門書といえる。

評者にとっていささか残念に思われるのは、著者のような長い研究のキャリアをもち、多くの研究成果を世に問うてこられた方ならば、それらの集大成と思われる本書には、それら単発の既刊論文名や掲載誌名、発表年代などを記載すべきではなかったろうか。また本書の中でしばしば使われている「水産地理学」とはどのようなものなのか、地理学の1つの分野として存立できるとするならば、それはどのような独自の研究分野と研究領域をもつものなのか、著者自身の見解を大胆に示してほしかった。いわゆる社会通念からの漁港ではない学問的な漁港の概念規定を、資本論を引用しながら下した著者ならば、著者自身の水産地理学の明確な概念規定をまず示してほしかった。文章表現を云々できる評者ではないのだが、著者独自の表現にしばしば戸惑ったことも事実である。定義を下したり類型を設定する際には、万人がわかるような表現であるべきではなからうか。20頁の著者自身による概念規定「漁港とは、漁民が漁船という生産手段をもって、出漁準備・水揚げをし、漁獲物の価値付加が行われるターミナル機能を持つ漁業上の生産手段の港湾である」などは、著者が長らく薫育してきた高校生などにとって、決して理解しやすい表現だとは思えない。112頁と117頁にそれぞれ岡本清三と岡本清造という人名をあげられるが、ひょっとしたら故岡本清造博士のことなのだろうか。229頁には経済企画庁や商工省という表現があるが、著者の指摘されている年代以降では、

商工省は存在していないので通産省ではないののだろうか。的はずれの書評になったことを恐れつつ筆をおく。

(柿本典昭)

David Herlihy et Christiane Klapisch-Zuber *Les Toscans et leurs familles, une étude du catasto florentin de 1427* (トスカナ人と家族, 1427年フィレンツェ資産台帳の研究) Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques. Paris, 1978, 703頁

本書については、すでに中世史家の清水広一郎氏が詳細な検討¹⁾を発表しておられるし、外国においても、多くの専門誌がこの注目すべき研究成果を取り上げている²⁾。すでに4年前に出版され、これだけ注目されている本書に関して、屋上に屋を架すに類するような紹介を試みるのは、他でもない歴史地理学の分野において、本書の意義の認識がほとんどなされていないからである³⁾。

ここで仮に資産台帳と訳しておいたのは *catasto* のことであるが、これは1427年の法律によりフィレンツェのコムーネによってなされた人口および戸主の資産状況の調査であって、首都フィレンツェおよびピサ、ピストイア以下フィレンツェの直接支配下にあるすべてのコムーネの都市部および農村部をおおうもので、この事業のための経費の計上は1435年に至るまでなされているが、カタストの大部分は1430年までに完成したと考えられている。カタストの直接の目的は、ミラノとの長期にわたる戦争によって疲弊した都市国家の財政を建て直すための税制改革であったが⁴⁾、それまでの農村における直接税のための台帳作成などの伝統を踏まえ、またベネチアにおける先例をも一部見習ったこともあって、このカタストは当時のものとしては、実に精度の高いまた情報量の豊富なものであった。

この膨大なカタストは、フィレンツェおよびピサの古文書館にほぼ完全な形で保存されているが、これまでのところ局地的、部分的に利用されていたにすぎなかった。すなわち、E. コンティによるフィレンツェ農村部における折半小作制形成史の研究や、本書の著者のひとりであるハーリーによるピストイア史の研究などがそれであったが、すでに1966年からこの膨大なデータをコンピューターに入れて処理する計画が、フランス・アメリカの共同作業という形でたてられた。フランス側で中心になった機関は

高等研究院(EPHE)で、継続的に国立科学研究中心(CNRS)からの研究補助金を得たし、アメリカ合衆国の側で中心になった機関はウィスコンシン大学で、様々なファンドから継続的に研究補助金を得て、結局約10年を要してこの作業が完成し、磁気テープは、ウィスコンシン大学とEPHEの第6部が保存することになった。

今回出版された本書は、まず、このカタストの性格の吟味に始まり、カタストの限界をも十分に指摘した上で、データをコンピューター化する際の原則を説明している。著者達が指摘しているように年齢、特に男子のそれに関しては、史料としての信憑性に問題があるし(たとえば40才の人口数は39才のその50倍である)、またカタスト作成以後の追記・訂正は、極めて部分的かつ恣意的であるので、このデータによって可能な分析は静態的な側面が主になり、動態的な側面の分析はかなり限定されたものになる。これらの限界にもかかわらず、年齢・経済活動の状態をも含めた人口と、各家族ごとの資産状態とを、地域別および社会階層別分析が可能のようにコード化していくという基本方針は正しく、今後の豊かな研究成果を期待させるものである。また本書の第2部において、カタスト作成の背景になったフィレンツェまたはトスカナ社会の行政・政治状況・民衆の生活慣行などが記述されているが、カタストのデータから知り得ることを分析・吟味するに際しての前提として、この部分に著者達の姿勢が明確に打ち出されている。

人口と資産と題された第3部、人口学的行動様式と社会環境と題された第4部、家族の姿と題された第5部が本書の約3分の2を占め、この部分はいずれもコンピューターによるデータ処理によって始めて明らかにされた結果の分析である。今後このデータを用いて、多くの学者がさらに多くの研究を発表することであろう。本書は、カタストによって知られるルネサンス期トスカナ社会の、いわば基本的なイメージを提示したものであるということができよう。

歴史地理学的な関心からすればまず第1に、イタリアルネサンス文化の中心であったフィレンツェ領の他の地域と比較しての社会的特色、第2にはこのフィレンツェ国家の空間組織、特に諸コムーネ間、および都市部と農村部との間の諸関係が、本書によってかつてないほど明瞭に示されたということが重